

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530486

研究課題名（和文） 対抗的公共圏と社会運動ネットワーク

研究課題名（英文） Counter-Public Spheres and Social Movement Networks

研究代表者

木原 滋哉（KIHARA SHIGEYA）

呉工業高等専門学校・人文社会系分野・准教授

研究者番号：20259922

研究成果の概要（和文）：

本研究は、反公害運動を担った宇井純の活動を中心にして、公害被害者の経験が公共的なものとして論議されて、対抗的公共圏とも呼ばれる言論空間を誕生させたのかを検証した。宇井純が公害問題をどのように理解していたか、宇井純が各地の現場を歩き情報を伝える役割を果たしたこと、自主講座を開き公害情報を発信する基盤を構築したこと、以上を検証した。

研究成果の概要（英文）：

This study picks up activities of Jun Ui who was a scientist and an activist of anti-pollution movements, and inspects how experiences of pollution victims were discussed and how public opinion spaces called counter-public spheres were created. Athis study inspects how Jun Ui understood pollution problems, how he conveyed informations of pollutions and how constructed infrastructures which sent informations of pollutions all over Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学、政治学、社会運動、公共圏、公害

## 1. 研究開始当初の背景

今日環境問題が大きな問題になり、公害問題はもはや解決したかのように目に見えなくなっているが、環境問題の原点は公害問題にある。水俣病など公害問題に早くから取り組んだ宇井純が収集した資料が埼玉大学に寄贈されたので、その資料をもとにして宇井純を中心とする公害反対運動について調査が可能となった。本研究は、これらの資料をもとにして、公害問題がどのように議論され、

焦点化されていったのかを検証して、環境問題と通低する問題構造を明らかにしようと試みた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、宇井純が埼玉大学に寄贈したメモなどの資料類などを利用して、また関係者への聞き取りを通して、「公害自主講座運動」を中心とする「対抗的公共圏」構築

の具体的実践を調査・研究することによって、「対抗的公共圏」の理念と意義を明らかにすることにある。

#### (1) 未公開資料調査方法の確立

宇井純が寄贈した資料は、本人が利用しやすいように整理されているとはいえ、どのように調査したらよいか、整理の方法を含めてまったく手がつけられていない。宇井純のような活動家が収集した資料は今後も公表される可能性が大きい。そのような資料調査の手法を確立することも、本研究の目的のひとつである。

#### (2) 理論的研究

本研究にとって、対抗的公共圏や社会運動ネットワークなどの概念は不可欠のものであるが、必ずしも確立された概念ではない。したがって、これらの概念の意味内容を明確にすることも本研究の目的である。

#### (3) 社会運動ネットワークの実態解明

同時に本研究の目的は、社会運動ネットワークと対抗的公共圏の理論的研究を進めるとともに、反公害運動ネットワークの中で形成された「公害自主講座運動」という「対抗的公共圏」の実践を通して、公害被害者の経験がどのようにして公共的なものとして論議され、科学技術の社会的妥当性がどのように論議されたのかを解明することにある。

### 3. 研究の方法

本研究を行うにあたって、三つの方法を用いた。

#### (1) 未公開資料の調査

第一に、公開されている資料、未公開の資料から、「公害自主講座運動」の内実とともに、それがどのようなネットワークに支えられていたのかを明らかにする作業である。すでに、宇井純『公害自主講座15年』（亜紀書房、1991年）、『公害原論』（亜紀書房、1988年）などの公開されている資料以外では、埼玉大学共生社会センターに所蔵されている「宇井純公害問題資料コレクション」を中心として、各地に散らばっている反公害運動関係の資料の収集と整理が必要である。

宇井純個人による新聞切り抜き、メモ、ノート、手紙類を整理する作業・調査・研究は、これまでほとんど実施されなかった手法であり、その手法は試行錯誤になると思われるが、その手法を確立することも重要な意義を持つことと思われる。

#### (2) インタビュー調査

第二に、資料から、対抗的公共圏としての

「公害自主講座運動」のある程度の内実を明らかにするとともに、同時に、関係者へのインタビューが欠かせないと思われる。こうしたインタビューは、単に事実を確認するためだけではなく、当事者が公害をどのように経験したのか、また科学的合理性をどのようにとらえ、その社会的妥当性をどのようにとらえていたのかを再構成するために必要とされる。とりわけ反公害運動のメンバーの中には、高齢の当事者も少なくないので、できるかぎり早急にインタビューをするという作業が必要とされる。もちろん、こうしたインタビューを実施するためには、事前の調査が必要であり、周到な準備の下で、インタビューは実施される。

#### (3) 理論研究

第三に、同時に言うまでもなく、対抗的公共圏についての理論的研究、他の事例研究について十分に検討することも必要である。最終的には、討議デモクラシーにおいて対抗的公共圏がいかなる意義を持つかが明らかにされる。なによりも科学的合理性と個別の経験のあいだで社会的妥当性がどのように形成されるのかを検証することができると考えられる。

### 4. 研究成果

本研究「対抗的公共圏と社会運動ネットワーク」の対象は、宇井純を中心とした「自主講座運動」である。その際に、埼玉大学に所蔵されている「宇井純公害問題資料コレクション」について調査を実施し、宇井純自身の足跡をたどり、ネットワーク形成にどのように寄与したのかを調査した。

#### (1) 資料調査方法の確立

今回の調査では、手紙などの資料は公開されておらず利用できなかったが、宇井純が収集した資料、新聞の切り抜きなどが利用できた。それらの資料から、宇井純の関心、活動内容、ネットワークの実態について明らかにした。こうした調査手法は、ほとんど実施されたことがなく、いわばパイオニア的調査といえるであろうし、今後同様の資料を調査する場合の指針となるだろう。

#### (2) 対抗的公共圏概念の確立

公共圏の概念が、個人の経験から切り離された言論空間であるのに対して、対抗的公共圏はなによりも個人の経験に根ざした言論空間である。さらに個人の経験に根ざしながらも、それが普遍的な意味を持つことが強調される空間である。公害被害という経験は、

個人の経験でありながら、公共的な、普遍的な意味を持つことから、反公害運動が対抗的公共圏の担い手に一つになった。

公共圏／対抗的公共圏概念を経験概念との関連で理解することにより、公共圏概念がより豊富化されて、公共圏が多様な色彩を帯びていることが強調されるようになった。公共圏概念については、近年数多くの研究が講評されているが、経験概念を中心とした対抗的公共圏概念へ着目した本研究は、公共圏の理論的研究を前進させたものといえるであろう。

また経験概念を中心におくことによって、これまで経験概念をさまざまに位置付けてきた思想史の中で、公共圏問題を考えることができるようになった。

### (3) 科学技術の合理性と公共圏

公害被害ははっきりしているのに、科学技術の厳格な合理性を基準にすると、必ずしも因果関係がはっきりしないことが少なくない。公共圏での議論は、科学技術的合理性ではなく、社会的合理性を基準としている。公共圏において公害問題が取り上げられるのは、この社会的合理性が基準となっている場合である。そして社会的合理性がどのようにして構築されるのか、宇井純がどのようにして、この社会的合理性構築に寄与したのか、検証した。科学技術者から構成される公共圏では科学的合理性が基準となっており、公共圏でも大きな影響力をもっている。そうした公共圏のあり方を問い直すものとして対抗的公共圏概念が積極的な役割を果たしていることを明らかにした。

### (4) 社会運動ネットワークの分析

#### ① 公害被害現場のネットワーク

宇井純は、自ら公害の現場に足を運んで、現地の情報をほかの現場に伝えていた。それぞれの公害の現場は、宇井純を介して、情報を伝達するとともに、他の現場の経験が届けられて、他の経験から多くのことを学んだ。こうして宇井純は、各地の公害の現場と現場を結び付ける役割を果たした。

宇井純のこのような活動は、ネットワーク形成に寄与したというだけではなく、これらのネットワークを通じて現場に根ざした知識の構築にも寄与した。

残念ながら宇井純が訪れた現地をすべてカバーするにはいたらなかったのが、ネットワークの全体像については今後に残された課題となる。

#### ② 反公害運動ネットワークと公共圏

さらに宇井純は、自主講座を組織して、公害現場の被害者などの当事者を東大に招いて、当事者みずからに自らの経験を語ってもらった。大学やメディアが集中している東

京で当事者に語ってもらうことで、全国的にメディアで注目されるようになるという効果的であった。各地域では地域メディアを通じて知られていることでも全国的なメディアの対象になっていないために、全国的は知られていないことも少なくない。宇井純はこうしたメディア戦略を考え、実践に移していた。こうして自主講座は、何よりも各地域と東京における情報格差を解消して、対抗的公共圏確立に大きな役割を果たした。

#### ③ メディアとしての自主講座

自主講座は、大学生にとどまらない多くの聴衆を集めて、東京において全国各地の公害問題について知ることができる場として機能した。同時に自主講座は、各地の反公害運動の情報を掲載する雑誌を作り、反公害運動の交流点として役割も果たした。

自主講座の担い手を中心とする公共圏は、そこで議論が展開されるだけではなく、そこから実際に反公害運動の担い手を輩出した。

#### ④ 自主講座とNGO

宇井純と自主講座の活動は、日本国内にとどまらず、世界に日本の公害の実態についての情報を発信し、さらに日本企業による公害輸出に反対する運動の一翼を担った。自主講座のこうした活動は、日本におけるNGO活動の一つの源流を形成している。

これはまた国内の社会運動と国際的活動の担い手であるNGOとのあいだのネットワークがどのように形成されたのかを明らかにするはずであるが、これまで十分な調査を実施することができなかった。

### (5) 今後の展望

宇井純と自主講座を中心にして、日本における反公害運動のネットワークがいかに形成されていったかを調査したが、反公害運動のネットワークは複数存在しており、それらのネットワークのあいだのネットワークの構造がどのようなものであるかは、いまだに未解明のままである。また反公害運動と平和運動、女性運動、マイノリティの運動など争点が異なるその他の社会運動のあいだのネットワークがどのようなものか、これについてもまだはっきりしていない。

1960年代以降の社会運動を見ると、さまざまな社会運動のあいだでネットワークが形成されていると予想できるが、今回の調査・研究でも、社会運動ネットワークの全貌は見えてこなかった。こうした点は、今後の調査・研究すべき重要な論点として残されたままである。また、聞き取り調査については、社会運動ネットワークの輪郭だけは明らかにすることができた研究目的を明らかにできるほどには実施できなかったが。

最後に、本研究の成果については、今後補充調査を実施しながら、順次、学会や論文の形

で公表していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

木原滋哉、対抗的公共圏のポリティクス、法政研究、査読なし、第74巻第3号、2007年、pp. 644-659.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木原 滋哉 (KIHARA SHIGEYA)

呉工業高等専門学校・人文社会系分野・准教授

研究者番号：20259922

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし